

北川颯人 京都大学大学院 工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻 博士後期課程

京都大学大学院

工学研究科卒

私は用意周到な性格で入念な準備と計画の下で行動するタイプです。しかし、修士課程を終えた後の博士課程への進学や、現在ドイツでこのレポートを執筆している事実は、私の人生計画に全く含まれていませんでした。

修士課程に入るにあたり、私は明確な自分のキャリア像を持っていました。つまり、修士課程を工学系の技術職を目指す上での必須項目であると捉え、その先における安定したキャリアを築くための無難な一步であると考えていました。非常に単純な進学理由です。

その目標に向け、修士1年目では就職活動と研究を両立することを目指しました。特に、夏休みはインターシップと学会発表で予定がほぼ埋まり、“休み”はほとんど無かったことを記憶しています。せわしなく新しい経験をする日々の中で、自分の価値観やキャリア観が少しずつ変化していくことを感じました。特に、生産工学関連のインターシップで、研究的な内容が実際に製品へ応用・展開される場面に遭遇したとき、企業での仕事よりも研究を深めることに対する関心が高まりました。ここで初めて博士課程進学という選択肢が私の前に現れました。

博士課程進学は一般的に無難な選択とは言えないでしょう。修了には多くの苦勞を伴いますし、その先のキャリアもある程度(広がりはあるものの)限定されるかもしれません。それでも私が博士課程進学を選択したのは、当初の人生計画から逸脱することへの不安よりも、自分の興味に従う直感と計画外の選択がもたらす新たな経験への期待感が勝ったからです。

修士2年目以降は、研究に多くの時間を割き、その結果として様々な機会に恵まれました。例えば、共同研究先での長期インターシップでは、研究がどのようにして実際の商品やサービスへと展開されていくのかを学びました。また、産学官連携プロジェクトにも参加し、学外の方と協力しながら自律的な生産ラインのためのシステム開発に取り組みました。学会等にも積極的に参加し、いくつかの賞をいただきました。これらの活動を通じて、自分の研究が評価される喜びに加え、未知の挑戦がもたらす面白さとやりがいを実感しました。

そして、博士課程へ進学した現在は、研究の幅を広げるためにドイツでの留学生活を送っています。慣れない文化や言語の中での生活は、苦勞や予想外なことも多いものの、それらは私に新たな視点を提供してくれています。

振り返れば、修士課程で私が得た最大の学びは、「計画通りに進めることが必ずしも最善ではない」ということです。予定調和的な現在に安心感を覚える自分が、計画外の選択をし、その結果としての新たな価値観や経験に満足している事実は大きな発見でした。

「人は経験を通じてのみ語るができる」ともいわれますが、語る内容やその深さを増すためには、経験を広げるしかないのでしょうか。そしてそれは、経験の中から生まれる計画だけでなく、予期せぬ選択や変更がもたらしてくれることもあるのではないのでしょうか。そしてそういう状況を楽しむことは、不確実性が増す現代

において、重要なことかもしれません。

私の今後の博士課程が、そして今後の人生がどのように展開してゆくのか、先行きは不明です。しかし、その紆余曲折の過程で得られるものこそが、私の人生をより豊かなものにしてくれると信じています。これから大学や大学院等それぞれの進路へ歩もうとする皆さんの前にも、多くの選択肢が表出すると思います。どのような選択をしたとしても、それを楽しみながら進んでいって下さい。